

## 文学ドキュメンタリー①

## 老舎はなぜ、自らの命を絶ったのか

## 趙清閣の章

## 独立独歩の人



50歳頃の趙清閣

趙清閣は1914年5月9日、河南省の信陽の官僚地主の家に生まれた。幼いころ母親を失い、数年間母方の祖母の家で生活していた。この家では私塾が開かれていて彼女はいとこたちと古典を学んだ。小学校に入るときに実家に戻ったが継母との折り合いが悪く、少女時代は孤独な日々を送った。この彼女の家庭環境を知った教師の妻が文章を書くことを教え、趙清閣は時間があれば文章を書くことで孤独を癒すことができた。

中学校に上がり15歳になったとき、両親が彼女の結婚の話を決めてきたことを偶然耳にした。自分はまだ勉強したいのに結婚なんてとんでもない。そう考えた彼女は祖母や従姉に相談し、家を出る決心をした。

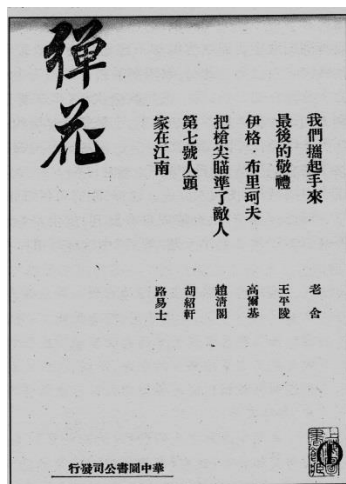
そして二人に助けられ1929年の厳寒の夜、ひっそりと家を抜け出て汽車に乗り開封に行った。開封では奨学金を得て開封芸術中高等学校に入学し、アルバイトをしながら学費を稼ぎ勉学を続けた。19歳のときに上海美術専科学校に入り、このあと知人の紹介で映画のシナリオ書きの助手になった。書くことも好きだったので新聞や雑誌によく投稿をし、専属の投稿者契約を結び報酬をもらえるようになった。

ここまで書いてだけでも、彼女が意志の強い、独立独歩の精神に満ちあふれていた人だったことがよくわかる。

20 歳になった彼女は魯迅(1)に手紙を書いた。ファンレターのようなものだったのだろう。すると魯迅はすぐに返事をくれて、上海の内山書店で会ってくれることになった。あこがれの魯迅に会って緊張している趙清閣に魯迅は、これからは古典の詩ではなくて散文を書いて自分の考えを広く知ってもらおうようにしたほうがいい、とアドバイスした。彼女はこれで自分の道を定めた。おなじころ、中国の演劇界の草分けとも言える洪深(2)たちと知り合い本格的に脚本を書きはじめた。

## 老舎との出会い

1937 年 7 月 7 日、盧溝橋事件が起こり、中国は日本との戦いに突入した。趙清閣は自分も抗日戦に参加するのだといって武漢にやってきた。河南出身の伝記作家張彦林が当時の武漢での彼女の様子を描写している。



『彈花』創刊号表紙。右端に老舎の名が見える。

武漢に着くや、趙清閣はすぐに抗日の大きな流れの中に融け込んだ。そして自分の能力を十分に発揮した。1938 年 3 月 15 日、彼女は編集長として華中圖書公司から雑誌『彈花』を創刊した。『彈花』は抗日戦が開始されて最初に発刊された文芸刊行物で、タイトルは「抗日戦争の銃弾で勝利の花を咲かせる」という意味である。創刊号で趙清閣は戯曲『把槍尖瞄準了敵人（敵に照準を合わせよ）』を発表し、この若干 24 歳の女性是最も大きな声でこの時代の人々に呼びかけたのだ。

趙清閣は垢ぬけていて太っ腹で気前が良く、非常に能弁だった。男性的な健康美と女性的な優しさを合わせ持ち、当時武漢で『文芸戦線』の編集長だった胡紹軒には強い印象を与えていた。1936 年、趙清閣が南京で『女性文化』を編集していたとき胡紹軒に原稿を依頼し、彼も彼女に原稿を依頼して二人の付き合いは深かったのだ。

1938年2月、胡紹軒は月刊誌『文芸』への執筆依頼をするために武昌の料亭に十数人の作家と詩人を招待した。その中に老舎と趙清閣も含まれていた。これが二人の最初の出会いであった。(原文A)

男性と対等に酒を酌み交わし、国家の難事を憂いて能弁に自分の考えを語る女性は、当時はとても珍しかったに違いない。趙清閣は文芸誌の編集をしていた関係で多くの文学者と知り合い、彼らに励まされながら生活の糧である戯曲を書き続け腕前を磨いていった。絵が描けて文章も書けて編集の能力も高い、おまけに都会的な垢ぬけた若い女性に出会ったら、老舎ならずとも心を引かれずにはいられないだろう。

老舎研究の第一人者で趙清閣とも交友関係のあった史承鈞(上海師範大学元教授)は、「二人はほとんど一目惚れのようにして恋に落ち、それから甘く悲しい恋心を抱きつづけた」と書いている。

趙清閣は抗日戦争中に武漢にやって来て「文協」設立の準備過程で老舎と知り合いました。二人は性格や目的が一致していたことから意気投合し、ほとんど一目惚れのようにして恋に落ち、甘く悲しい恋心を抱きつづけました。

二人は共に「文協」の設立に参加し、趙清閣が創刊した抗日戦争のための文芸刊誌『弾花』を共に作りました。その後前後して重慶に行き、北碚では脚本を共同で執筆して文芸で「文協」のために働き続けました。

抗戦と文学が彼らの共通の歩みで、戦争がもたらす苦難の中で彼らは患難を共にして慰め合い、二人はまさに「抗戦夫婦」として結ばれるところでした。これは戦争という特殊な時代にあって、大后方にいる知識人が特殊な環境に置かれた場合には往々にして起こったことです。

しかしこの状態は1943年老舎の夫人が3人の子どもを連れて封鎖を突破して突然やって来たことで中断されました。それ以降、趙清閣と老舎は常に二つの場所に別れていたのです。〔大后方(大後方)とは抗日戦争期の国民党支配下の西南地区を指す歴史用語〕(原文B)

史承鈞はまた傅光明に宛てた手紙の中で、胡絮青の武漢行について書いている。

老舎には多くの友人がいました。友人には二人のことを隠すことができず、何人かの友人は老舎のことを心配して胡絮青に手紙を書きました。それで胡絮青は自分の家庭を護るため、危険を冒してまで彼に会いに来たのです。老舎の家族が来て趙清閣は去っていきました。

……趙先生(趙清閣)にはどうしても譲れない一線がありました。それは老舎が胡絮青と離婚し、彼女と子どもたちの生活、教育の環境を整えないかぎり一緒には住まないというものでした。老舎も確かに努力はしました。

彼女は「自分も半分古い考え方を持っており、名誉を重んじている」と言いました。彼女には名分が必要で、それがあいまいなままで彼と一緒に暮らすことはできなかったのです。

……特に、胡絮青は彼の抗戦活動を支援し、子供たちを養育し、老舎に代わって彼の母親に孝養を尽くし、死に水を取るという責任を担いました。彼は妻に多くの借りができたのです。それで彼が妻に離婚を切り出すのは筋が通らず、妻の承諾を得るのが非常に困難だというのは当然のことでした。(原文 C)

## 老舎との最初の別れ

老舎は再び家族と暮らしはじめ、趙清閣は北碚を去り、重慶の冰心(ペンシン)のもとに行った。冰心は彼女より 14 歳年上の作家で常に彼女のことを気にかけてくれていた。冰心は趙清閣に、古典の小説を研究して自分の得意とする戯曲を書いたらどうかと勧めた。趙清閣は彼女に励まされ、心の傷を癒すために全精力を傾けて戯曲を書いた。それが『紅樓夢話劇集』で、これが後に起こる反右派闘争の時に批判される材料となった。

抗日勝利の後、趙清閣は上海に戻り、多くの文壇の友人との交流が復活した。そして、老舎との縁も、実は切れてはいなかった。老舎は最初と変わらぬ情熱的な態度で彼女を求めており、これは文壇関係者のだれもが知るところであった。出版社の主催で開かれた老舎の歓送会にも彼女は参加し、船上まで見送りにも行っていたのだ。このときに老舎から「待っていてくれ」と言われた。老舎のこのことばで、彼女は生涯を独身で通すことになってしまった。このことについては洪深の娘洪鈴が 1988 年 3 月 20 日に趙清閣自身から聞いたこととして記録されている。

私は決して安娥ではありません。私は絶対に彼(老舎)に会いませんでした。彼はずっと私を待たせたのです。待たせたのです。重慶でも北京でも、いつも私を待たせたのです。これが彼の、中年男性の如才なさというものだったのです。彼は私を欺いたのです。私の態度は「あなたが離婚しない限り会わない」というものでした。(原文 D)  
(安娥は女性劇作家・作詞家で、武漢で知り合った妻子ある詩人田漢(7)の愛人となり、田漢の離婚が成立したあと結婚している。)

老舎は中国への帰国を望んでいなかった。趙清閣が陽翰笙(3)に頼まれて帰国の手紙を書いたとき、「帰国は望んでいない、帰りたくない」と返信してきた。

建国のときに陽翰笙が K (老舎を指す) と冰心に帰国を促す手紙を書いてほしいと言ってきました。私は冰心と老舎に書きました。冰心は帰ってきました。それが私の手紙によるものだったかどうかはわかりません。

Kは返信に書いていました。「僕は戻らない。君と僕とでいっしょにシンガポールに住もう。そこを拠点にしよう」

私がこの手紙を受け取ったとき〇〇もいたので、彼女はこのことを知っています。私はとても怒りがこみあげてきました。侮辱されたと感じたからです。彼の意志は、私に情婦になれと言っているようなものでした。もしもそれを受け入れるのであれば、とっくの昔にそうしていたでしょう。

そのあとまた彼から手紙が来ました。香港でとりあえず会おう、と提案していました。それには同意しました。条件は「三人で一緒に話し合い、まず解決したあとに、それからあとのことを考える」というものでした。これは私が彼とシンガポールで一緒に暮らすことを受け入れるという意味でした。しかし、このようにはなりません。彼は直接、帰国してしまったのです。(原文 E)

老舎は香港には立ち寄ったが、趙清閣には会わなかった。趙清閣が出した条件を受け入れ胡絮青をまじえての話し合いをする度胸など、彼にはとてもなかったのだ。

趙清閣は老舎への想いを断ち切り（実際には断ち切れなかったのだが）、それからずっと一人で生きていくことを決めた。このとき彼女は36歳になっていた。

## 上海での再出発、激動の後半生



上海劇作家協会員。中央が趙清閣

趙清閣は1950年に上海劇作家協会に入会し、映画や歌劇の脚本書きの仕事が続いていた。ところが反右派闘争が始まり、以前書いた『紅樓夢話劇集』のせいで封建文学家というレッテルを貼られ資料室の仕事にまわされた。

続いて上海にも文革の嵐が押し寄せてきて、1966年、彼女は「三面紅旗」のシナリオを書かなかつたことを糾弾され「反動文人」「国防芝居の追隨者」と書かれた紙の帽子をかぶらされた。叔母までそのせいでつるし上げられたことを知ると、彼女は涙を流して壇上で自己批判をした。



紅衛兵たちが我が物顔に家々を荒し回り、家財は略奪された。そのときすでに老舎は自殺していたのだが、彼女はまだそのことを知らなかった。友人たちが彼女にその事実を伏せていたのだ。紅衛兵たちはからかいながら老舎の自殺を彼女に伝えた。彼女は強いショックを受けた。おそらく文革のときの心労が原因であろう、翌年脳梗塞を起こし半身不随になり、回復には4年を要した。その後は再び執筆活動や絵画制作を開始し、友人たちとの交流も復活した。

ところが1985年1月19日の上海『解放日報』に載った「著名女性作家趙清閣入党」という記事に、多くの人が驚きを隠せなかった。これまでどの政党とも関わりを持たず、1959年に共産党プロパガンダ映画「三面紅旗」の脚本を書くことを拒否した彼女が、なぜ70歳を超して入党したのか。洪鈴も驚いて、このことについて彼女に質問した。

この政治的身分が趙おぼさんにいったいどういう意味を持つのか！ 彼女はこう言った。

「過去において彼らは私をずっと信頼していませんでした。いま彼らの一員になりました。これは私が名分を正したということを意味します。」

当然、これも一種の見解ではあるが、私は趙おぼさんのことばの中に、自分を揶揄しているような一種の苦い響きがあるのを感じた。この問題は非常に繊細で、私は趙おぼさんを苦しめたくなかったのもそれ以上は質問しなかった。

しかし趙おぼさんがこの件に触れて以降、この種の矛盾した心理の表現、彼女が直面している自分ではどうにもならない実際の環境、彼女の不安、熟考などを私ははつきりと見てとることができた。……

あるとき趙おぼさんは台湾にいる蘇雪林(小説家・古典文学研究者)から来た手紙に返信を出した。その中に問題点があると指摘されたのだ。蘇雪林は趙清閣が病気を抱えている事を知っていた。自分の給料と原稿料だけで生活していて支出も多い。それで困ってはいないかと尋ねた。それに趙清閣が「還可以(「まあまあ」の意)」と答えたのだ。この「還」の字が一部の人間の不満を買った。「大陸社会(中華人民共和国を指す)は繁栄しており大陸の人民の生活は幸福が保障されている。それなのに趙清閣は自分の生活がどうして『まあまあだ』と言うのだ。」と彼らは言った。

この指摘は趙おぼさんを不快にさせたが、同時に不安にもさせた。彼女は晩年になって面倒に巻き込まれることを望まなかった。それで外国にいる友人たちとの文通を断った。友人たちは彼女の置かれている状況を理解し、彼女を巻き添えにしたくないと思い、彼女とは連絡をとらなくなった。(原文 F)

洪鈴のこの推測が、趙清閣が共産党員になったという理由としてはもっとも当たっているように思われる。彼女はもう十分、時代の荒波に翻弄されてきた。大病も患った。これ以上の苦労を引き受ける気力も体力もなかった。すでに70歳を超したのだ。平穏な老後を過ごしたいと思うのは当然だ。

趙おぼさんの友人や国内の大手雑誌、新聞社が K (老舎)についてあなたの知っていることを書いてくれと依頼してきた。そのことについて趙おぼさんが私に言った。

「私は返事を書きました。『書くことはできません。理由は三つあります。一つは、もし私が書くとしたら必ず彼を貶める言葉を使うでしょう。それには私は耐えられません。長年の友であり今は去っていった人に対してそのようなことを書くのに、とても耐えられません。二つ目は、書く必要がないと思うからです。三つ目は……』」

趙おぼさんは、文学界の同志である老舎と彼の創作に対してずっと尊敬し称賛していた。だが彼個人に対して、趙おぼさんも独自の認識を持っていた。

1999年2月17日、趙おぼさんの家で、彼女が私にこのように話した。私はこれを聞いたとき、これが、趙おぼさんがする最後の「批評」になるだろうと思った。「私は老舎に対して二つのことを思っています。一つは、彼の小説と学問には心から敬服しています。二つ目は、彼は愛すべき人ではなかったということです。彼は個人の損得にこだわり、非常に臆病者でした。……恐れていました。」(原文 G)



晩年の趙清閣

彼女は自分がいろいろな人に助けられて生きてきたことを知っていた。戦争が終わり重慶から上海に戻るときには旅費が足りなかった。それで路上に物を並べて売っていたときに老舎と郭沫若(4)が偶然通りかかって窮状を知り、上海の友人たちにそのことが知らされるとすぐにみんながお金を集め彼女に送ってよこした。彼女がみんなから好かれていたこと物語るエピソードでもある。

だから彼女は、多くの人を助けてきた。中国の社会には相容れない内容の小説を書き「毒草」と批判された張愛玲(5)が1955年にアメリカに去る時、家族のだれにも知らせなかったのにただ一人連絡をとって会ったのが趙清閣だった。彼女は張愛玲に自分が編集していた雑誌の原稿を依頼し、その場で原稿料を前渡しして彼女の渡航を助けた。晩年の趙清閣の姿をよく知っている史承鈞が書いている。

彼ら(老舎と趙清閣)は淡い恋心を濃密な友情へと変化させ、依然として常ならぬ深い関心を保ち続け、それは文革の初期に老舎が太平湖に自ら入っていくまで変わることとはなかった。天国とこの世に隔てられても、かえって趙清閣の想いは深まっていった。老舎の誕生日を彼女は一人で祝い、命日には一人で祈った。新聞で老舎に関係の

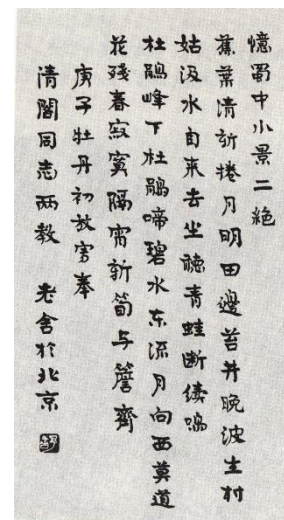
ある記事を読むといつも、ほかのものよりは真剣になって読み、切り取って保存することさえあった。

……客間の壁には老舎が1960年の春に書いて送ってくれた書「憶蜀中小景二絶（記憶の四川は比類なき）」が掛けられ、書斎の机には老舎が1939年北路慰勞団に参加し、甘肅省酒泉からわざわざ持ち帰って彼女に贈ってくれた硯が置かれている。

ベッド脇のテーブルには彼女が肺結核にかかったときに老舎から送られた小さい痰壺がある。老舎は彼女の生活の中のどこにでも存在しているのだ。一部を語る以外に、彼女は老舎とのかつての恋愛については口を閉じたままだった。彼女は文壇には正常でないところがあり、みなが偏見を強く持っていると考え、老舎のイメージを損なうようなことをしたくなかった。人の噂も恐ろしいもので、自分の晩年の平穩をかき乱されたくなかったので口を閉ざしていたのだ。

このために彼女は亡くなる直前、文革の後も大事に保存していた老舎からの手紙を燃やしてしまった。彼女は死ぬまで老舎のことを想い、老舎を守ったのである。

趙清閣は一生結婚しなかった。身内はなく晩年に至る数十年間、お手伝いの呉おばさんといっしょに助け合って生きてきた。彼女は名誉にも利益にも無関心で、書物を友として、孤独と勤勉な執筆活動のなかで余生を過ごした。（原文 H）



#### 老舎から送られた病氣見舞いの手紙



清閣 昨日、家壁（趙家壁）(6)からの手紙を受け取りました。あなたの病状が進んだことを知りとても心配しています！ どうか良くなりますように。焦ってはいけません。くよくよ悩む必要はありません。病気を治すにはまず心を強く持ち、治療にあたらなければなりません。心の中で心配していれば、効く薬も効力を失うでしょう！

ちょっと気功でもやったら気と心を養うことができ、それで病気が治るでしょう！

韞如たちが2月の上海公演のために出発しました。以前、舒繡文が上海にいた時、名医に見てもらって治してもらったことがあります。彼女も上海に行くので、彼女にそのことを尋ねてみてください。

私は北京に帰ってからすぐに忙しい日々を送っています。精神力が不足しています。草々！ 祝吉！ 致敬！ 舍 一九六四年十一月十八日（原文 I）

（韞如と舒繡文は老舎の戯曲を舞台で演じた女優）



## 永遠の別れ

老舎は一九六三年四月に広州で行われた広州文芸会議に参加したあと上海に立ち寄り、三日間滞在し、肝炎を患って入院していた趙清閣を見舞った。これが二人の最後の別れとなった。

趙清閣は若いときから酒豪で知られ、老舎と別れたあと一時期浴びるほど酒を飲んでいて、これが災いして 1962 年に肝炎で倒れたのだった。このことを知った陽翰笙、田漢、茅盾(8)は連名で上海映画製作所に趙清閣に良い治療を受けさせてくれと要望書を送った。彼らが趙清閣のことを常に心にかけていたことがわかる。彼らは、老舎とのことを知っていたから同情していたのかもしれないが、それよりも、一人で生きることを選んだ趙清閣に、戦乱を共に生き抜いた同志としての友情を感じていたのだろう。

亡くなる数日前に趙清閣が焼却した手紙は老舎がアメリカから送ったもので 100 通余りあった。自分がいなくなったあと、他人がその手紙を見てあれこれ詮索するのに耐えられなかったのだろう。潔い凜とした生き方をした人である。

1999 年 11 月 27 日の午前 5 時 40 分、趙清閣は上海華東病院で息を引き取った。12 月 6 日に上海市社会科学院文学所主催の追悼式が行われ多くの人が参列した。

- .....
- (1) 魯迅 (1881-1936) : 文学者。左翼作家連盟の中心的人物として多くの作家に影響を与えた。
  - (2) 洪深(1894-1955) : 劇作家、演出家。中国演劇界の草分け的存在。
  - (3) 陽翰笙(1902-1993) : 脚本家、映画製作者。1938 年軍委政治部第三庁主任秘書に就任し、周恩来の助手的な存在として働いた。
  - (4) 郭沫若(1892-1978) : 文学者、歴史学者、政治家。1927 年に日本に亡命。建国後は帰国して政治家としての道を歩いた。
  - (5) 張愛玲(1920-1995) : 小説家、脚本家。のちにアメリカに移住。
  - (6) 趙家璧(1908-1997) : 編集者、作家、翻訳家。出版者として老舎たちの作品を多く出版した。
  - (7) 田漢(1898-1968) : 詩人、劇作家。日本に留学し、帰国後は中国演劇界の指導的地位にあった。
  - (8) 茅盾(1896-1981) : 小説家、文学評論家。社会活動家としても有名。

### 【原文掲載図書・URL】

- A : 『錦心秀女 趙清閣』張彥林河南人民出版社, 2005.
- B : 小説梁祝リャンチュウの著者「趙清閣」と「老舎」の恋愛事情 <http://blog.liangzhu.jp/?eid=16>
- C, H : 老舎与趙清閣：此恨綿綿 [http://blog.sina.com.cn/s/blog\\_4adc338c0100x7hv.html](http://blog.sina.com.cn/s/blog_4adc338c0100x7hv.html)
- D, E, F, G : 『趙清閣選集』釀出版, 台北, 2016.
- I : 『書信世界里的趙清閣与老舎』復旦大学出版社, 上海市, 2012.